

当事者となつた高次脳機能障害専門家の経験



一九七一年 高等部卒 関 啓子

せき けいこ

国際基督教大学（ICU）語学科卒。国立障害者リハビリテーションセンター学院聴能言語専門職員養成課程卒。言語聴覚士。医学博士。（財）東京都神経科学総合研究所、中村記念病院（札幌市）などを経て、一九九九年神戸大学医学部助教授に着任。医学部教授を経て、二〇〇八年神戸大学大学院保健学研究科教授。人間情報学会理事、日本高次脳機能障害学会評議員、日本神経心理学会評議員など高次脳機能障害の領域で活動中の二〇〇九年七月脳梗塞を発症。懸命のリハビリの末、二〇一〇年五月、職場復帰。

英和卒業から

言語聴覚士（ST）になるまで

私は高等部卒業後入学したICUの聖書研究会の活動で信仰を持ちました。英和時代、毎朝の礼拝や授業で学んだ聖書の言葉が、私の中で育っていたおかげかもしれません。ICUでは言語学を学び、その特別授業の中で「失語症」という脳損傷後遺症を初めて知りました。当時、ビデオは未整備で、失語症とはどのような症状かを知りたいと思った私は、講師の先生にお願いして臨床を見学させていただきました。伊豆の温泉病院での失語症治療の見学は一週間に及び、その初期に、私はその後の人生を大きく変えた患者さんに出会つたのです。その方は、身体の麻痺はなく日本語らしく聞こえるものの理解不能な言葉をペラペラと話され、自分の言ふことが相手に通じていないことに全く気づかないご様子でした。後で知りましたが、この方はウェ

ルニッケ失語というタイプの失語症をお持ちだったのです。（詳しくは拙著『失語症を解く－言語聴覚士が語ることばと脳の不思議』（人文書院二〇〇三年）をご参照下さい）

私は、さりげない口調で会話する講師の先生と、この宇宙語を話す患者さんとのやりとりに驚愕して、このようなことが起つて得るのだろうか、もしできることなら、このような方のために自分の言語学の知識や経験をつぎ込んで全力でよくしてあげたい！と思いつた座に言語の専門家になる決心をしました。

私は、その後、卒論資料収集のため、スペインに一年間滞在し、フィールドワークをしましたが、その間もSTになる夢を忘れませんでした。私は、高齢の患者さんと接するには社会経験を積む必要があると思い、帰国後は就職氷河期にもかかわらず、東京銀行を受験し、無事社会人となりました。貴重な社会人生活と結婚を経て、憧れのST養成課程に入学したの

は、その五年後のことでした。

とも名前が知られる存在になりました。

晴天の霹靂

養成課程を卒業した私は東京都の医学研究所に就職し、さっそく失語の改善技法に関する研究を始めました。その頃、STは国家資格ではなく、研究所時代やその後の北海道時代に臨床に従事した病院で「無資格診療」と揶揄され、肩身の狭い思いをしたものでした。むしろ、患者さんの役に立ついい臨床や研究をして、とやかく言う人に対して恥ずかしくない仕事をしよう、懸命に頑張つてきました。あれから三〇年近く経った今では、STも国家資格となりました。私は失語をはじめとする高次脳機能障害の専門家であることに、常に誇りを持って仕事をしてきました。

私は、その後、卒論資料収集のため、スペインに一年間滞在し、フィールドワークをしましたが、その間もSTになる夢を忘れませんでした。私は、高齢の患者さんと接するには社会経験を積む必要があると思い、帰国後は就職氷河期にもかかわらず、東京銀行を受験し、無事社会人となりました。貴重な社会人生活と結婚を経て、憧れのST養成課程に入学したの

を目指し、ひたすらリハビリテーションに打ち込み、発症から一〇カ月月経った二〇一〇年五月に職場復帰を果たしました。これまで診てきたどの脳卒中後の患者さんよりも早い復帰でした。この全経過において、私は専門家としての自分の知識や経験を高次脳機能障害の回復に役立てることができました。現在の私は左上肢の麻痺が残存し、発話にもプロソディ（韻律）の障害があります。発症以来

過ごしていました。自分で自分の生活を「セブン・イレブン」と評していましたほど、激務の中にいました。その私が日中、繁華街で倒れたのです。三年前に指摘されていた心房細動による心原性脳塞栓症でした。目撃者のおかげで、私は近くの市立病院に救急搬送され、発症三時間以内が有効とされる血栓溶解療法を受けました。幸いにリテーションの専門家であり、私はこの専門家集団のサポートにより、急性期を過ごすことができました。その後、転院した回復期リハビリテーション病院でも、復帰

英和卒業から
言語聴覚士（ST）になるまで
私は高等部卒業後入学したICUの聖書研究会の活動で信仰を持ちました。英和時代、毎朝の礼拝や授業で学んだ聖書の言葉が、私の中で育っていたおかげかもしれません。ICUでは言語学を学び、その特別授業の中で「失語症」という脳損傷後遺症を初めて知りました。当時、ビデオは未整備で、失語症とはどのような症状かを知りたいと思った私は、講師の先生にお願いして臨床を見学させていただきました。伊豆の温泉病院での失語症治療の見学は一週間に及び、その初期に、私はその後の人生を大きく変えた患者さんに出会つたのです。その方は、身体の麻痺はなく日本語らしく聞こえるものの理解不能な言葉をペラペラと話され、自分の言ふことが相手に通じていないことに全く気づかないご様子でした。後で知りましたが、この方はウェ

ルニッケ失語というタイプの失語症をお持ちだったのです。（詳しくは拙著『失語症を解く－言語聴覚士が語ることばと脳の不思議』（人文書院二〇〇三年）をご参照下さい）

私は、さりげない口調で会話する講師の先生と、この宇宙語を話す患者さんとのやりとりに驚愕して、このようなことが起つて得るのだろうか、もしできることなら、このような方のために自分の言語学の知識や経験をつぎ込んで全力でよくしてあげたい！と思いつた座に言語の専門家になる決心をしました。

私は、その後、卒論資料収集のため、スペインに一年間滞在し、フィールドワークをしましたが、その間もSTになる夢を忘れませんでした。私は、高齢の患者さんと接するには社会経験を積む必要があると思い、帰国後は就職氷河期にもかかわらず、東京銀行を受験し、無事社会人となりました。貴重な社会人生活と結婚を経て、憧れのST養成課程に入学したの

は、その五年後のことでした。

とも名前が知られる存在になりました。